

# 注意機能とマス計算 —スクリーニング検査としての可能性—

戸名 久美子\* 星ヶ丘医療センターリハビリテーション部言語聴覚室

脳損傷者の認知リハビリテーションにおいて、通常の計算式では正答可能な対象者が、マス計算ではミスや脱落を見せることがある。この反応の違いは注意機能にあると考えた。本研究の目的はマス計算の特性とその特性を応用しスクリーニング検査となりうるかどうかを考察することにある。健康高齢者29名（男性12名，女性17名）の50マス計算（加算）の平均反応時間は80.7秒（標準偏差26.7）であり、通常の計算式よりも時間がかかり、個人差も大きかった。注意機能を測るストループ検査との間には中程度から強い相関を示したが、認知機能全般をスクリーニングするMMSEとの間に相関は無く有意傾向にあった。FABで中程度の相関を示した。このことよりマス計算課題実施に注意機能が必要である傾向がよみとれた。また、脳損傷者の症例から、マス計算と通常計算を組み合わせるとより詳しく、注意を支える感情や情動の変化をも観察できるのではないかと考えられた。マス計算は簡便な注意機能のスクリーニング検査となりうることが示唆された。

キーワード ⇒ 注意, スクリーニング検査, マス計算